

歴史を良い方向へ

主教 植田仁太郎

二〇〇八年という年は、世界中の誰もが予想しなかった世界情勢の中で終わった。百年に一度という金融危機が世界中を覆い、それにつれて経済活動全体が、地域や分野を問わず減退してしまった。失業する人、住む所を失う人が大幅に増えるだろうと報じられている。そういう事態に対して、政治は、どうも有効な手立てを講じているようには見えない。過ぐる年は、歴史が前進した年だとは到底思えない。

記憶の中では、歴史が前進した、と思える年が何度かあった。ベトナム戦争が終結してベトナムの人々が平和と国家統一を達成した年があった。ベルリンの壁の反対側の諸国家が崩壊し、いわゆる東西冷戦が終った年があった。歴史が、良い方へと進んでゆく希望があった。南アフリカのアパルトヘイト（人種隔離政策）が終った年もそうだった。それで人々の全ての苦勞が無くなったわけではない。新しい社会体制の下で、人々は苦勞を続けた。しかしそれは、希望と実りに導かれる苦勞だった。

二〇〇九年という年はどういう年になるのだろうか。私たちが計算し予想できるような形で、すぐに「歴史が良い方へ進む」ということは無いのだろう。けれども、今思えば、教会と心ある人々は、ベトナム戦争に反対し、共産主義的独裁体制に抵抗し、反アパルトヘイト運動を支援し続けた。少なくとも歴史を「良い方へ進ませる」努力をしてきた。それは無駄では無かった。信仰的良心を一層磨いて、全ての人に大切なことのために、少しでも力を注ぐ年とした。歴史の歯車が、いつか「良い方」へ進むように。